



1

山陰のD岳に行こうと決心したのは父親の二十三回忌の法要がきっかけでした。法要後の会食の場で、母親があのこと口にしたのです。

「おまえが達者でいられるのもお父さんのおかげだよ。お父さんが自分の命と引きかえに、おまえを生かしてくれたんだからねえ」

私は黙ってうなずきました。もう、なんども聞かされたことばですし、私自身も、もしかしたらそうかもしれないと、思っていたからです。

あれは二十二年前の四月半ばでした。大学卒業後、福岡の会社に就職しましたが、鹿児島の実家には、ほとんど帰省しませんでした。というのも休みといえれば山登りばかり

していたからです。四月半ばの土日も、大学時代の山仲間二人と、山陰のD岳に登る計画を立てていたのです。

出発の寸前母親から電話があり、父親が突然倒れて病院に担ぎ込まれたというのです。父親は五十九歳ですが、病気が知らずの元気で、毎日工務店で働いていました。

「頭の中に血がいつばいたまっつて、手術もできないんだよ」我が家は私しか子どもがいませんし、近所に親戚もいません。すぐさま福岡駅に向き、西鹿児島行き列車に乗り込みました。山仲間には列車の中から電話しました。

病院については夜の八時過ぎでしたが、父親はすでに他界していました。

葬儀は工務店の人がすべて面倒を見てくれたので、私は喪主の席に座り、弔問客にお辞儀を繰り返すだけで済みま